

## 日本語教育実践研究（8）

### —「日本語音声教育」の実践—

担当教員 戸田 貴子

日本語教育実践研究（8）では、音声教育実践実習を通じて日本語の発音指導について研究します。

別科日本語専修課程では、多種多様な言語文化背景を持つ学習者を対象に、「聞きやすく内容が伝わる発音」の習得を目指す学習者のニーズに応えるため、2000年度に発音指導科目を設置しました。現在は、発音A・B・Cというレベル別クラスにおいて、初級後期終了から超上級に至るまで体系的な発音の授業が行われています。日本語教育実践研究（8）の実習生は、初級後期終了から中級前期の学習者を対象とした発音Aクラスの授業を見学し、グループに分かれて個別指導を行います。

実習後は、音声分析・自己分析に基づいた実践報告と授業見学による相互評価・意見交換を行います。また、複数の外国語と日本語との対照研究を行い、学習者の母語と日本語との音韻体系の違いについて考察します。このような作業を通じて、学習者の発音に見られる母語転移について理解を深めていきます。本実践研究のシラバスはホームページ（<http://www.f.waseda.jp/toda/>）に掲載されていますのでご参照ください。

音声は文字に表すことのできない韻律的情報が多く、意識化されにくく、学習しにくい領域であると言えるでしょう。文法・表記などの他領域と比較し、音声教育の方法論は開発途上で、発音指導用教材も数少ないのが現状です。しかし、いわゆる「外国語なまり」の強い学習者の発音は、日本語母語話者にとって聞きづらく、内容が伝わりにくいことが多く、別科留学生を対象としたアンケート調査の結果からも、発音上の問題がコミュニケーションの弊害となることが報告されています。

『実践研究』創刊号では個別指導担当グループによる共著、第2号では受講生全員による共同研究という形で論考が掲載されています。受講生が話し合いを重ねた上で執筆形態を決定していますが、今学期は各自が単著として執筆することになったレポートの中の3本が掲載されています。そこには、実践を通じて実習生が学んだことや、学習者の発音が意識化され、モニター能力が育成されていく様子が描かれています。

日本語教育実践研究（8）の実習生全員が準備に時間を割き、より効果的な発音指導のための工夫を重ねてきたことが実践研究の成功の鍵となっています。今後もこれを足がかりに、コミュニケーションを重視した発音指導法の検討を進めていくことが期待されます。

（トダ タカコ・日本語教育研究科助教授）